

ベナンの風に吹かれて

山崎有美

(平成 20 年度 1 次隊 青少年活動 ベナン)

それでは健一朗先生の後という事でプレッシャーあるんですけども、黒明先生と同じ 20 年度 1 次隊で青少年活動としてアフリカにあるベナンという国に行ってきました、山崎由美有美と申します。

最初にベナンと聞いた時にえっと思って、どこという感じでペナン島みたいな感じで、みんなにもベナンに行くよというペナン島？といわれてどこかわからない感じだったんですけども、実は私はケニアを希望していたんです。けれどもケニアは男性じゃないとだめという事で、同じアフリカという事でベナンになりましたが何も情報がありませんでした。ちなみに場所はここで西アフリカにあるこの小さな国なんですけれども、情報はゾマホンの出身国だよというのしかインターネットでも出てこなくて、実は協力隊事業が始まったのも 2005 年で私が行った時はちょうど 3 年目でした。ですので先輩隊員もほとんどいないという状況で、もちろん大使館もなくてすべてが初めてという感じだったので、まあスタッフの方はベテランの方が多かったのでわからない事や困ったことは色々教えてもらったんですけどもあまりにも情報がなかったので、行く前から現地のスタッフの方とよく連絡を取ってどういう準備をしたらよいのかといった話をよく聞いていました。

ベナンは人口約 870 万人で面積は日本の約 3 分の 1 です。やはりアフリカなので民族がすごくはっきりしていて民族ごとの色々な物が強い国です。言語もフランスの植民地だったので公用語はフランス語という事で駒ヶ根訓練所ではフランス語をみっちりやったんですけども現地ではほとんどが民族の言葉じゃないと通じないというのが現実でした。ちなみに私も英語の教員なので英語圏をお願いしますといったんですけど、「英語できるんだったらいいでしょ」といわれてフランス語になって駒ヶ根では本当にフランス語で泣きました。もう毎日こんなに勉強したことは今までにないというくらいすごい泣きました。

それで宗教の方も一応イスラム教が多くてそのほかに現地の宗教としてブドゥー教という宗教があるんですけど、やはり宗教の色が強いのでクリスマスとか新年とかっていうのは全然日本で想像するようなものではありませんでした。ですので年がら年中各宗教でのお祭はあるけれども大きなイベントがないという感じ、何もメリハリのない、楽しみのない毎日でした。クリスマスも普通に仕事があるしお正月も 1 月 1 日だけお休みで 31 日も仕事 2 日も仕事で、日本の学校って休みが多くていいなとか夏休みがあつていいなとか冬休みがあつていいなとか、そういうことを思いました。

気候は雨季と乾季です。

まず最初にベナンでの生活を簡単に紹介したいと思います。ベナンの洋服はパーニユと呼ばれるカラフルな布を着ます。民族衣装をほとんどの人が着ているのでこういった布屋さんがあって、まず布を買います。そこから自分でデザインした洋服を作ってもら。すべてオートクチュールですね。ですので既製品のお洋服がなくて、常に自分が着たい布を選んで作ってもらというのが楽しみでした。例えばこんな風に何かイベント、イベントというかお葬式とか結婚式とかがあるとみんなと同じ布を買って自分の好きなデザインで洋服を作ってみんなでそれを着るとというのが習慣なので、本当に毎月のように布を売りに来て、「次誰だれが死んだから買いな」とか、「次誰だれおめでただから買いな」といって布を買わされてそれで洋服を作るというのが習慣でした。子ども達もこんな風に布を買って兄弟みんな一緒に着ています。それでどうしてもお金がない子たちもいるので、そういう子たちは布だけ買って自分の体に巻きつけるという方法で服を着ていました。比較的左端の子どものおうちは裕福なのでこうやって作ってもらえるんですけど、全然お金がないおうちは布だけ買って自分の首にうまく巻きつける方法で着てました。

生活、食事なんですけれども、主食はトウモロコシの粉です。年間 3 回トウモロコシを作るのでトウモロコシを機械に入れて粉にしたものをお湯で溶いたものが主食です。朝なんかはそれをちょっと多めのお湯でといで飲み物状になったものを飲みます。昼夜はそれをちょっと硬くしたものを食べます。ひたすらトウモロコシです。本当に食事については慣れるまで、女性隊員は結構すぐに慣れるんですけど、男性隊員はもう最初の 1 カ月で 5 キロ 6 キロ痩せていく人が多くて見ていてかわいそうでした。女性隊員は 1 週間くらいで現地のものおいしく感じられるようになるんですけども、男性隊員は激やせしていました。出てくる写真はすべて現地食なんですけれども、現地食しかないので、ほんとにトウモロコシトウモロコシ、芋、たまにご飯、たまにいちばん左はマカロニなんですけれども、量を増やすためにご飯もそうなんですけどひたすら茹でるんですね。水の量を多くして茹でて、量を 2 倍にした段階でやっとならば食べられるという感じなので食事についてはかなり苦労しました。

住まいは基本的にはこういった村の生活は真ん中のようなもので右上が水上集落、左下が伝統的な現地のおうちです。先程世界に飛び出すみんなの先生という DVD で先生のおうちが映ってたと思うんですけど、私も行く前にあの DVD を見て、「あんな綺麗なおうちに住めるんだ」とすごく楽しみにして行ったんですけど私の家はこれでした。左上が私の家なんですけど、自分の住んでいる町では一番いい家だといわれて、しかも JICA が鉄格子をつけてくれたので安全だよといわれたんですけど、反対にこれがついた事でここに日本人が住んでいるというのがばれればで通る人通る人が「ユミユミ」って毎回声をかけてプライベートも何もなかったです。鉄格子も土壁なのでつけてくれていても重みでだんだん外れてくるので、途中でコンクリートみたいなものを買って自分で落ちないようにつけたりしながら生活していたので、JICA の人にい世界中でこんなおうちに住んでるのはあなたぐらいですって、ここで住めたらどこでも生きていけるよっていわれたので頑張って 2 年

間生活しました。右下が絶対おうちには欠かせない、井戸というか水をためるもので、乾季になると水が全然ないので雨季の段階でここにたまる水を全部ためておきます。これを使って生活をします。もちろん水道、電気は一応あるんですけど、水道は使えた数の方が少ないですし、電気も2年間で使えた数の方が少ないです。

これを見てもらうとわかるんですけど朝は、土壁が落ちてくるので掃き掃除から始まって、昼は水汲みですね、夜は料理をして蚊帳の中でござを敷いてそこで寝るという。マラリア汚染国なので1回マラリアになると命にかかわるよといわれていたので日本からすごく大きな蚊帳を、スーツケースの半分が蚊帳でしたのでそれを家の中に張ってそこで生活していました。

左下は髪の毛を編んでいる所なんですけれど、水がないので現地の人は1カ月に1回髪型を変えてこのように編んでいます。これは髪の毛を洗わなくていいという利点があるので、私も何回かトライしたんですが日本人の髪だとやはり持って2週間で、あとはかゆくて耐えられなくなってしまいますので取ってしまいます。

番外編としてアフリカっていろんなイメージがあると思うんですが、基本的に頭の上にも何でも載せます。水汲みもそうですし、野菜を売っている子もそうですし、机なんかを運ぶのもすべて頭の上なので、どんな小さなものでもどんな大きなものでも頭の上に乗せて運びます。左下の水は5リットルくらい入るんですけど私たちは下からでも持ち上がらないのに中学生くらいの子どもたちが頭に載せて毎日朝と昼と夜と水汲みをしているというのが現実です。

ベナンの問題点をまずお話ししたいと思います。

さっきもいった通り水問題が一番の問題で、子どもたちは学校にも行かず朝昼夜は必ず水汲みをしなければいけません。

あとは幼い子供、妹とかの面倒をみななければいけないので学校に行けないという現実があります。左側の写真はじゃあ学校に全員行かせてくださいという事で、大統領が変わってそのような方針を立てたんですね、無料にしましょうって。そうすると何が起こるかという、机も足りないし、椅子も足りないし、学校も足りないという現実です。ですので本当は6人掛けのところすごい数の子どもたちが座っていました。

ゴミ問題です。いままで自給自足の生活をしていたのに外国から色々なものが入ってきて、それを捨てる処理の方法を知らないので、すべて今までと同じように自分の家の横に捨てているのでこういう状況になってます。これをどうするかというと、1カ月に1回誰かが火をつけて燃えたら終わりというような生活でした。

実際の活動に入りたいと思います。職種は青少年活動です。配属先はゾボドメ市役所というところ。要請内容は青少年余暇センターを活用した青少年の余暇活動の充実というものでした。1ヶ月間市役所に勤務する中でどういった事が出来るかなと考えた時に、今

の状況ですので余暇活動なんて誰も考えてないし学校に行くのがやっとなんですね。もちろん学校に行けない子もいっぱいいるのでこれは私が来た意義が全然変わってくるなという事で、結局は社会教育、余暇活動よりも学校教育の方が大切なんじゃないかなという結論に1カ月で達しました。

みなさん要請書というのをもらっていると思うんですが、私は要請書をもらった時にカウンターパートなし、配属先と一緒にやる活動ほぼなしと書いてあったんですね。これでは私は何をしたらいいんだというのが一番の悩みでして、こういう方はなかなかいないと思うんですけど、カウンターパートがないという方はけっこういると思うのでそういう話を中心にしたいと思います。

まず最初に配属先である市役所との関係作りが大切かなと思ったので、ひたすら挨拶を知らない人でもなんでも市役所に出入りしてる人に挨拶をして回りました。

あとはおしゃべり、必要ないなあと思うおしゃべりがすごく大切なので、おしゃべりをしたり、あとは買い食いっていろいろなものを買って来る、ピーナッツとか何とか売りに来るんですけど、アフリカの女の人ってひたすらそれを食べるんですね。男の人もそうなんですけど。どんどん太っていくんですけど。一緒になって食べていました。食べたくなくてもこれが会話の最初だなと思いながら地元のものでもなんでも食べるようにしていました。

あとは全然関係ない時にこういう事したいんだよねとか、全然カウンターパートでもなんでもないのに、子どもたちとこういうのをしたいんだけどどう思うかっていうのをすぐに話すようにしていました。

あとは全然市役所とのつながりがないので、半期に一度自分はこういう活動がしたいんだっていうのを勝手に作って勝手にいろんな人に渡していました。何でおれにこんなの渡すんだといわれながら、いや私はこういう事がしたいんだっていいながら渡していました。

あとは毎週1週間の活動予定を自分の与えられた机の上に、誰も見てないんですけど置くようにして、自分がいなくてもどこに行っても何をしているのかが誰でも見てわかるようにしておきました。遊んでるんじゃないよって、私がいなくても活動してるんだよってことを分かってもらえるようにしました。それはこんな感じで、例えば必ず月曜日は朝、朝礼があるので市役所に行きますよって約束をして、水曜日の午前中も市役所に行きますよって、あとは教会に行ったり、小学校で活動したりっていうのをしているよって、自分が今どこにいるのかっていうのを必ず分かるようにしておきました。

その中でどういう活動をしていったかというところまず一つが識字教室という事でフランス語圏でフランス母語という話もあったんですけど現地の人はフランス語話せないし、書けないしということで、あれだけ駒ヶ根で苦労した私がやってよいのかと思いつつ週に2回、20代の女性たちがほとんど学校に行っていないので、自分の名前も書けない状態でしたから、そこでアルファベットとか簡単な計算とかそういうものを教えました。

さらに学校での授業という事で何がいいかなと考えた時に、先生たち自身が美術や体育の授業を受けてないので子どもたちに教えられないんですね、それをある先生からいわれたので「じゃあ私が教えるよ」といって、市内にある学校を巡回して教える事にしました。主に6年生と書いてあるのは、言葉がやはりフランス語しかできないので、小学校6年生ぐらいになると徐々にフランス語も話せるようになるので、私の指示が通るように6年生を選びました。これが現地の先生なんですけど、ほんとに民族衣装のままですべて体育っていても外に行って指導所を子どもたちに見せて「こうやってやれ」というのが現実だったので、だったら私の方がまだましかなと思ってやりました。右上は縄跳びを日本から送ってもらったので、それを活用して縄跳びを教えました。

1年目何か成果を残したいなと思って絵画展を開く事にしました。これもどうしようかなと考えたうえで市役所をやはり巻き込みたいと思って、市長さんに市長賞を作るから選んでくれと、市長賞だからあなたが商品を作ってくれ、買ってくれってお願いをして、この人が市長なんですけど、市長さんに選んでもらって表彰式まで行いました。こういう経験を子どもたちはした事無がかったし、市長もなかなか面白いなと思ってもらえたので、この後続けていってくれたらいいなと思っています。

2年目は縄跳び大会を開きました。これは日本の自分の行っていた学校から縄跳びを送ってもらったので、それをもとに縄跳び大会を開きました。ビデオがあったのですが割愛します。

その他余暇活動の充実として最初の目的、要請であった青少年余暇センター、右上のすごい建物があるんですけど誰も使っていないんです。ただ建物があるだけで。中にもいすや机が置いてあるんですけどどう活用していいかわからない。建物はスウェーデンの援助で作ってもらったんですが、作ってもらって終わりで活用ができていないという状態だったので、水曜日の午後は学校が休みなので、その日と毎月1回の土曜日にイベントとして行っていました。

あとは中学校で希望者を集めて日本語教室も行っていました。

あとは日本文化紹介という事で自分の任地やベナン国内について、これは他の同じ国に派遣されている隊員とともに協力して毎月1回文化紹介を行っていました。切絵であったりカンボックリであったり、トイレトペーパーの芯を使った双眼鏡を作ったり、兜を作ったりしました。

一番人気は何といっても空手なんですね。空手をやるっていうとこれだけの人がばあーってどこからともなく集まってきて見ようとするので、私も空手は全然できないんですけど「ちょっとやって」とかいわれて構えただけでみんなにおおーとかいわれてさすが！みたいな、それで騙していましたね。「私は空手ができるんだ」といって子どもたちを集めていました。あと習字もちょっとやりました。

日本の中学校に対して派遣中何をしていたかという、毎月「ベナンの風に吹かれて」というベナン通信を送っていました。その成果があったのか、いらなくなったものを集めてベナンに送ろうと子どもたちがいい始めてくれて、その結果としてさっきいった縄跳びが送られてきました。

ベナンは通信がうまくいかず、郵便もダメでベナンから 50 枚ハガキを送ってつくのが 10 枚、日本からベナンに荷物を送っても着かないよといわれていたので、せっかく子どもたちが送ってくれたものが届かないといやだなあと感じていたんですけど、実際届いてそれをベナンの子どもたちに還元できたのでよかったなあと思います。

活動を終えて思うのは健康第一なので、私はよく食べていました。よく飲んでいました。ベナンにいて一番強くなったのはお酒です。あとよく寝ていました。本当に気がつくとき食べて気がつくとき飲んで気がつくとき寝て本当にベナン人だなあといわれるくらい、最後にちょっと動くくらいの感じで、本当に健康が一番です。皆さんも気にせずやってください。

最後に帰ってくる時に残っている隊員達に、やはり語り合った方がいいよって話をしました。隊員同士もそうだし自分の配属先の人ともそうなんですが、こんなに色々な人たちと話せるチャンスってないんですね。私も教員をずっとしていたので教員以外の人たちと話すこともなかなかないですし、私は四捨五入をして何十歳になる年です。しなかなかな若い人と話す機会も少なくなってきたんですけど、大学卒業してすぐの私にとっては子どものような年の人と一緒に活動をしていると、私は先生が嫌いだという隊員もいて「こんなところで先生と一緒に働くなんて」、とかいわれながら、「まあねそういう事もあるんだよ」なんていいながらお互いにいろんな話をしていく中で、ああそっか先生はそんな時そういう気持ちだったんだといわれたり、反対に「生徒はそういう時そういう気持ちだったんだ」なんていいながら隊員ともいろいろ話をすることで見えてくるものがたくさんありました。

さっきもいった通り楽しむことが一番だと思うので、活動もそうです。プライベートもそうだと思うので、楽しんだもの勝ちです。私も悩みがあつて最初のころは職場でも発狂して泣き喚いたことが一度あつて無理とか思って、私がこんなに頑張っているのにどうしてとかって思って、それでちょっとすっきりして次から心を入れ替えて頑張ろうという気持ちになれたりしたので、思ったように生きるのが一番いいかなと思います。やるときにはやって遊ぶ時には遊ぶ、それが一番だと思います。

最後にさっきもいった通り自分らしくいる事が一番いいと思うので、楽しかったら笑うし、悲しかったら泣くし、許せない時は怒るし、疲れたら休むっていう、それが活動を長続きさせるコツなのかなという風に思います。納得いかない事もいっぱいあるし、嫌な事もいっぱいあるんですけどそれ以上に楽しい事もいっぱいあるので、常に自分がその感情

に素直に生きていけばいいのかなと思います。

最後に帰国後の活動として、私は帰ってきた時に異動になりました。勤務校が変わったのでどうしようかなと悩んだんですが、たまたま前任校の方から帰ってすぐに「せっかく子どもたちにも色々なもの送ったし講演会を開いてよ」っていわれて、最初に前任校で講演会をやらせてもらいました。「みんなが送った縄跳びがこういう風にして使われたよ」とか、「みんなが送ってくれたクレヨンで絵画展やったんだよ」という話をしたら子どもたちはすごく喜んでくれて、もっともっと自分たちにできる事はないかななんて風に考えてくれる子も多かったです。

あとは新しい学校では、やはり先生達も私が協力隊から帰ってきて、何この人という目で見ていて事がすごくよくわかったので、なかなか表だっている色々な事が出来なくて最初は自分のクラスで学活とか道徳を使って色々な話をしていた中で、今度は学年主任が「じゃあ学年朝会で話しなよ」といってくれて学年朝会で話したら、今度は他の先生が興味を持ってきて「じゃあ職員研修で話しなよ」といわれて職員研修で話させてもらって、先週最後に「保護者会で話しな」といわれて保護者会でも自分の経験を少し話させてもらいました。

今、力を入れているのが図書室に特別コーナーを開設してベナンについて学ぼう、協力隊とはなんなのみたいな事をやらせてもらっています。

私を感じた事や経験した事を、どうやって子どもたちに伝えていったらいいのかという悩みがすごくあったんですけども、やはり伝える事、何でもいいから自分が感じた事や思ったことを素直に日本の子どもたちに伝えていくことが大切なのかなと思っています。

今日の話聞いても思ったんですが、これから本当の意味で自分達、現職教員の協力隊活動が始まるんだなあと感じています。任国での2年間は本当に無我夢中で目の前のことばかり一生懸命やってきましたけど、帰ってきていろんな生徒達を見た時に、ここから初めて日本の子ども達に還元して行けるのかなと感じているところです。早口になりましたが御清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

質問：お話ありがとうございました。すごくおもしろかったです。色々お伺いしたい事あるのですが、最初の方で男性隊員はこうだった、女性隊員はこうだったというのが私はすごく気になっていて、やはり衛生面とか日本とは絶対違う国ばかりだと思うんですが、現地で女性特有の悩みがあったら何かお伺いできればと思います。

先生：女は強いんです。女の体は子どもを産むようにできているから本当に強いので、真っ先に男どもがどんどんやられていってどんどん病気になってええーとやっていってる間に、女の人はずいぶん現地の物を食べて、おいしいねとやっていいながらどんどん太って

いって、本当に3ヶ月間、ベナンでは現地に行ってから3ヶ月間自分の任地を離れちゃいけないっていうルールがあってそこから出られないんですけど、私なんかすごい村に住んでいたんで食べ物何にもないんですね。「どうすんだろ」ってみんなに「大変だよ」っていわれたんですが、私は全然平気でどんどん太って行っちゃうのを心配していた位なんですけど、男の人に3カ月後に会ったら激やせしてて、「何があったの？」ってきいたら「食べ物が食べられない」とか「水が合わない」といって男の人の方が苦労していました。最後の方になってくるとだんだん落ち着いてきて男の人も戻ってくる人多かったんですけど、全般的に女の人の方がやはり強かったですね。

あとはトイレが無いので、私が行った時にはトイレをするときに女性の方はかなり苦労をしていましたね、どこに行っても本当にトイレは無いのでそういう心配をしている人が多かったです。

あとは病気については早め早めに無理をしない事だと思うので、特にアフリカに行かれる方も多いと思うんですがベナンも病院がないので、何かあった時にはフランスに行かなきゃいけません。ですから病気をしちゃうと活動もできないまま終わっちゃうので、病気にだけはならないように、そのためには早めに休息を取って、早めに薬を飲んでという事前の予防をしていました。

質問：お話ありがとうございました。お薬をお持ちになったという事なんですけど、あらかじめこれは持って行ってよかったなと思うものとか、これがあったから命拾いをしたとかそういうものはありますか。

先生：私は実は一度も病気をしていないんですね。多分それだからアフリカに行けたんだと思うんですが、本当に一度も病気もせずに病院にもかからずに行ってこられました。訓練中に薬がもらえます。一人一袋、その薬だけをもっていけば十分に賄える量のものが、風邪をひいたとき用とか、怪我をしたとき用とか、湿布とかそういう細かいものが入っているのでそれで充分だと思いますが、病気を多くしている人はそれでも足りなくなって私は最後の方にはあげてましたね。足りなくなった人たちに「私余ってるからあげるよ」って。あとはマラリア汚染国に行く人たちはマラリアの予防薬を飲み続けなければいけないので、私が行った時には毎日飲むものだったので、毎朝その薬を飲まなきゃいけない、それを習慣づけなきゃなんかの時に駄目だよっていわれたので、途中から1週間で1回飲めばいい薬にJICAが推薦する薬が変わったのでそこからは1週間に1度飲めばよくなったんですけど、そういうのもあるのでJICAがいう事をきちんと信じて守っていけば大丈夫だと思います。体にだけは気をつけてください。